



## 新年を迎えて

明けましておめでとうございます。

昨年は幸いにも大きな台風がなく、一昨年の台風被害からの立ち直りが比較的順調に行われたことと思います。カンキツ類などは依然として厳しい状況にありますが、技術支援など当センターを有効に活用していただきながら、一日も早い復旧を願っております。

現在、当センターは、食味が良好で耐暑性が高いアテモヤの果実特性や追熟方法等の研究、加工原料として期待されるジャボチカバの生育特性等の研究などブランド農産物確立のための取組を進めています。また、短形ダイコンの品種比較など島内供給野菜の作型開発、熱帯果樹等の病虫害防除技術の検討、固有植物の増殖技術の確立等にも取り組んでいます。これらについては、試験成績発表会などで皆様にお伝えしていきます。

営農研修所では、パッションやトマト、マンゴー等の実証展示栽培を実施しています。多くの皆様が作付けしているこれら農作物の最新情報や制度融資など農業経営上の支援等、皆様のお役に立てるノウハウを有していますので、お気軽にお尋ねいただければと思います。

畜産指導所では、羽毛鑑別鶏の試験配布を行いました。年間産卵数が約300個、飼料が約15円/日ですので、一定の収益が見込

めます。また、昨年は、ふれあい牛舎を建てました。皆様にとって牛の導入は、土壌改善や子牛の出荷による収益というメリットがありますので、参考にしてください。20年度は、展示用鶏舎等を整備する予定です。採卵鶏の普及とともに、ふれあい機能の充実による観光への対応など、地域産業の振興に幅広く寄与していきます。

現在の小笠原諸島振興開発計画は20年度が最終年度です。昨年は、JA施



ドラゴンフルーツの花

設整備について、21年度以降の振興計画の検討を皆様とさせていただきます。今年は、事業内容の詳細の検討を進めていきたいと思えます。また、土地の流動化や担い手対策など、小笠原の農業振興に向けて中長期的に取り組むべき課題の検討を関係機関とともに進めていく所存です。

平成20年の始まりにあたり、引き続き皆様方のご支援とご理解を賜りますことを職員一同からお願い申し上げます、年頭の挨拶とさせていただきます。 <産業課長：小泉>

## アテモヤ栽培先進地視察研修

以前、本誌において、現在注目している熱帯果樹の一つとしてアテモヤを紹介しました。現在、農業センターではアテモヤの栽培技術の確立に向けて試験研究を進めています。そこで今回は、今年10月に先進地視察研修を行った三重県におけるアテモヤ栽培の紹介をします。

### 三重県南部の概要

今回研修を行った三重県南部にある東紀州地域は、年間降水量 2850mm（小笠原 1258mm、東京 1574mm：2001～2005年平均）と降水量が非常に多い地域であり、また、カンキツ類の栽培が盛んな地域でもあります。

### 三重県紀南果樹研究室

研修先の一つである紀南果樹研究室では平成11年から試験研究が行われており、人工受粉の方法や果実の保存方法、加工品の開発等についての研究が行われています。栽培は棚仕立てで行われています。アテモヤは人工受粉が必要である事を考えると、小笠原におけるパッションフルーツに近い作業体系であることがわかります。訪問した時期は収穫期に入っており、アテモヤが鈴なりになっていました。当研究室によると有望品種は‘ピンクスマンモス’、目標収量は10aあたり2トンとのことでした。

### 石本農園

実際にアテモヤを生産・販売している生産者の方にもお話を伺うことができました。石

本農園は、カンキツ栽培（栽培面積4ha）を中心とした経営で、アテモヤは5aのハウスで加温栽培（15℃設定）を行っています（25株）。現在6品種が導入されており、主に‘ピンクスマンモス、ジェフナー、ヒラリーホワイト’が栽培されています。定植2～3年目から収穫が始まり、昨年は約600果を収穫（収穫初年）。今年は昨年の約2倍の生産量を見込んでいるとのこと。昨年から数度、地元のメディアに取り上げられたことで注目度が高まり、訪問時は注文が殺到していました。当農園ではホームページも開設し、ネットからの注文販売も行っており、販売価格は3000円/kg。今後の課題は栽培方法や収穫時期の見極め、出荷方法等、色々なお話を伺うことが出来ました。



石本農園のアテモヤ棚仕立て栽培

### 最後に

パッションフルーツやマンゴーに続く新たな熱帯果樹として注目しているアテモヤ。農業センターでは、これからさらに研究を進め、小笠原の特産熱帯果樹として栽培が普及するよう努めていきます。御期待ください。

<河野>

## 安全で信頼性の高い野菜生産を目指して

### 野菜生産における安全性

牛海綿状脳症（BSE）、食品偽装表示、未登録農薬の使用等の問題が発覚して以降、食の安全・安心を求める消費者の声は近年になく高まっています。生鮮野菜に関しては平成8年に発生した病原性大腸菌O-157による集団食中毒事件の発生により、生鮮野菜の消費が大幅に落ち込んだことは記憶に新しいところですが、この事件を発端に、野菜生産から流通に至るまでの様々な生産管理マニュアル作りが進められてきました。現在では、生産から消費者までの食品の履歴を記帳し、問題が起きた場合には迅速に遡及追跡できるようにするトレーサビリティシステムの導入の取り組みも進んできています。

### 適正農業規範（GAP）

GAPとは「Good Agricultural Practices」の略語で、「適正農業規範」と訳されます。農産物の生産段階（栽培、収穫、洗浄、選果、包装、出荷）における病原微生物（病原性大腸菌、サルモネラ等）、汚染物質（カビ毒、天然毒、重金属、硝酸性窒素）、異物混入、さらには農薬使用の適正管理や環境への負荷低減等による食品安全性はもとより、周辺地域も含めた生産環境がもたらす可能性がある危害を最小限に抑えることを目的に、これらの危害要因と対策のための適切な管理方法を示す手引きであり、それを実践する取り組みのことです。「規範」というと硬い印象を受けますが、決して難しいものではなく、「商品」としての農産物を販売するためには常識となる「食品安全」をはじめ「環境負荷の低減」「農作業における労働安全」

を達成するために、作業工程ごとのリスクをリストアップし、それらを最小限にとどめる方法を実践、記録に残し、さらにシーズン終了後には次期作に向けて作業内容の見直しを行うという、一連の取り組みのことです。生産者の皆さんが行っている栽培履歴や使用農薬の記帳はまさにGAPの柱となっています。

### 現場におけるGAPの実践

生産から流通までのなかで最もリスクが高いのは、病原性微生物による汚染といわれています。その大部分は、作業員または動物の糞便が源となっています。この要因を十分に理解し、厳しく管理することで、衛生被害を最小限に抑えることが出来ます。生産者が出来ることとして、醗酵が不十分な家畜堆肥は使用しない、安全な灌漑水の確保、設備や資材の洗浄・衛生管理、ネズミなど病原微生物を保菌している恐れのある小動物などの排除、作業員自身の健康管理などのほか、生産履歴および農薬使用の記帳、保存が挙げられます。これらを個々の生産者だけでなく、小笠原全体として取り組むことで、消費者だけでなく、市場や小売店にも大きな「信頼と安心」を「小笠原ブランド」として届けることができるようになります。

「『食品安全のためのGAP』策定・普及マニュアル」が農林水産省ホームページに掲載されています。（[http://www.maff.go.jp/www/press/cont2/20050428press\\_14.html](http://www.maff.go.jp/www/press/cont2/20050428press_14.html)）参考にしてください。

<小野>

## リュウキュウミカンサビダニの被害拡大

### (定期的な薬剤散布が防除のポイント)

平成 18 年に小笠原で初めてリュウキュウミカンサビダニが確認されましたが、現在、カンキツ類で被害が広がっており、特に営利栽培されるレモンやブントンへの影響が懸念されています。

この害虫の被害を受けた果実は、はじめ果皮に淡褐色の小斑点があらわれ、次第に黒色に変わり、その後ケロイド状に硬くなりサメ肌果となります(図1)。症状が進んだものは、果面の汚れがひどくなるため、商品性は著しく低下します。



図1 被害果実の様子

リュウキュウミカンサビダニの被害が広がった理由は、体長が 0.2 mm程度と小さく、肉眼で発見することが難しいこと、果実に被害が出て初めて寄生に気づくため、適期に防除ができないこと、冬期でも果実や葉などで生息し、被害の発生が春葉から始まること、防除方法が確立していないこと、などがあげられます。

以上のことから、リュウキュウミカンサビダニを防除するには、年間を通して定期的に薬剤を散布することが必要です。利用する薬剤としては、果樹類で登録のある石灰硫黄合剤やマシン油乳剤(薬害を生じやすいので

使用時期に注意)、カンキツ類でリュウキュウミカンサビダニの防除に登録があるコテツフロアブル、サンマイル水和剤、カンキツ類でミカンサビダニの防除に登録があり、他県の試験結果でリュウキュウミカンサビダニにも効果がみられたオサダンフロアブル、ダニカット乳剤20、カネマイルフロアブル、コロマイル水和剤、ダニエモンフロアブル、バロックフロアブルおよびマイルコーネフロアブル(全てミカンサビダニの防除目的で利用すること)が期待できそうです。定期的な防除を行うために、これらの薬剤の登録内容や効力を考え、防除例(表)を作成したので参考にしてください。

今冬より営農研と農業センターでは、薬剤の効果確認など、リュウキュウミカンサビダニの防除方法確立に向けた取り組みを行う予定です。農家の皆様も被害拡大を防ぐため、少しでもカンキツ類を栽培されている方は、定期的な薬剤散布を心がけるようお願いいたします。

表 リュウキュウミカンサビダニの防除例

使用時期	農薬名
1～2月 (冬期)	マシン油乳剤
5～6月	オサダンフロアブル
6～7月	サンマイル水和剤
7～8月	マイルコーネフロアブル
9～11月 (収穫期)	コテツフロアブル
11～12月 (収穫後)	サンマイル水和剤

< 営農研修所：菊池 >